

第5回

天心遺跡と六角堂

茨城大学五浦美術研究所教授

小泉晋弥

近代日本を代表する文明思想家　岡倉天心
(1863年～1913年)は、東京美術学校
(現東京藝術大学)校長の職を辞して1898
(明治31)年に弟子たちとともに日本美術院を
創設しました。やがて、天心は茨城県北茨城市
五浦に居を構え、1906(明治39)年には日
本美術院を再編成して、4人の愛弟子、横山大
観^{かん}、下村観山^{かんざん}、菱田春草^{しんそう}、木村武山^{ぶざん}を呼び寄
せ、日本画の近代化を目指した美術活動が展開
されました。

天心邸・長屋門・六角堂(明治38年建築)は、
1955(昭和30)年に天心偉績顕彰会から茨
城大学に寄贈され、平成15年に登録文化財とし
て認定されました。特に六角堂は、天心が自ら
設計したものとされ、天心の創意の奇抜さを示
して、他に類を見ない強烈なイメージで五浦を
特徴づけています。杜甫の草堂である六角亭の
構造に、仏堂の朱塗りの外壁と屋根上の如意宝
珠の装いを施し、内部に床の間を備えた茶室と
しての役割をかねたハイブリット建築です。

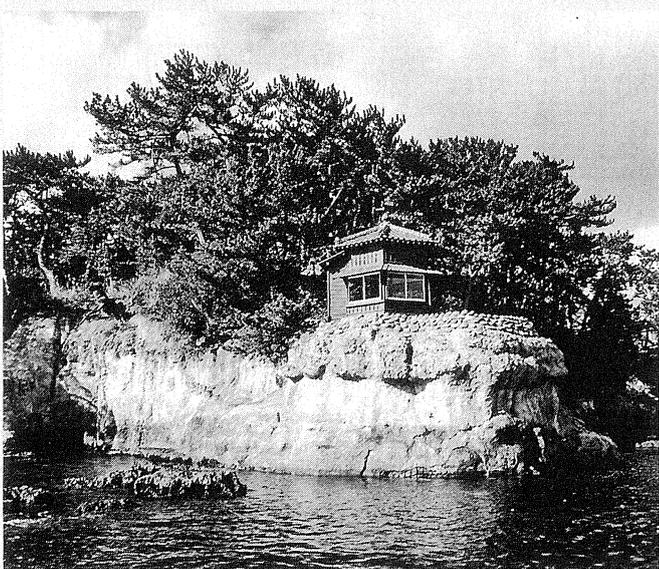
仏堂としての六角堂は、親鸞^{しんらん}が夢告^{むこく}を受けた
京都の頂法寺^{ちやうぽうじ}のものを参照したと考えられてい
ます。また草堂で、詩想をはぐくみ、釣りを楽



六角堂の目の前に広がる太平洋。内部にたたずむと水面に囲まれて、海に浮
かんでいるような気持ちになります。天心没後に訪れたタゴールや北原白秋
など、多くの文化人を魅了した眺望です。

しんだ杜甫の境地に天心も憧れたようです。六
角堂の四面の窓は、園林亭子^{えんりんていし}としての解放感を
取り入れています。当初は板敷きの床の中央に
六角形の炉がありました。天心は、床の間に絵
画や書を掛け、目の前の太平洋のパノラマを眺め
ながら茶を喫したことでしよう。

有名な『茶の本』執筆と六角堂建築計画は、
同時進行だったようです。計画変更の痕跡も
あって、『茶の本』の構想が進むにつれて、六
角堂に茶室のイメージを重ねたのだと思われま
す。天心は、これを「観瀾亭子」(大波を見る東
屋)と呼んでいました。そして『茶の本』と同
様に、六角堂にも、道教と禅(茶室)が渾然一
体となった天心の世界観が表現されています。



天心の世界観が表現された六角堂(撮影:岡倉禎志=天心の曾孫)

※1 杜甫の草堂 唐代の大詩人である杜甫が、安史の乱を避けるため成都に建てた東屋。
※2 亭子 東アジア各地に見られる伝統建築で、休憩したり景色を眺めたりするための東屋。